

長良・岩野田

九条の会だより

NO159
2020年
5月号
事務局 林
090-6769
-9809



特集号

「自衛隊加憲論とは何か」の 著者 瀬瀬厚氏との対談

今月は、新型コロナウイルスの影響で会報の編集が進まず、「自衛隊加憲論とは何か」の著者瀬瀬厚さんが我々の質問・意見に応える「兄弟問答」を進めておられますので、実兄君平さんとの縁もあってその内容を「会報」に掲載させて戴きます。

*なぜ今、自衛隊加憲論か

司会（兄、君平さん）…皆さん、こんにちは。瀬瀬君平です。さて、このところ憲法をめぐる様々な問題が起きています。私には現在明治大学の特任教授をしている「瀬瀬厚」という弟がおりまして、その弟と「兄弟問答」を試してみたいと思います。よろしく。瀬瀬厚…いきなり宣伝で申し訳ないけど、昨年3月に『自衛隊加憲論とは何か』（日本機関紙出版センター）と題する小冊子を出したので是非こち

らをも読んで欲しいと思います。

現憲法の二項には手を付けない、削除しないという言い方で危惧の念を払うかの如く説明を安倍首相はしているけれど、新たに憲法に堂々と自衛隊を明記することは、これまで自衛隊の増殖を抑止してきた現行の戦力不保持条項が事実上空息死することを意味しています。

つまり、憲法で明確に戦争放棄と戦力不保持を謳うことによって、自衛隊法という法律でその存在が規定されている自衛隊を統制したのですが、それが出来なくなっていることです。

法律は憲法の下位の存在です。憲法第9条は、本来は日本に軍隊の存在を想定しないで成立したのですが、現在では第9条とは先に警察予備隊、そして保安隊を挟んで自衛隊が軍隊化しないよう、或いは戦争に出て行かないよう規定する役割を担うことになってきたのです。

司会（兄）…でも日米安保条約があるよね。これって自衛隊が戦争に駆り出される危険性を生むものだよ。

瀬瀬厚…確かにね。でも日米安保も所

詮は二国間の国際条約で法律です。だから憲法論から言えば、いくらアメリカが相手だとしても日本国憲法を凌駕することは出来ないのです。だからアメリカは憲法をそのままにして、日米共同作戦が展開できるように、言葉を変えればアメリカの同盟軍としてアメリカに貢献できるような「軍隊」とするために国連中心の集団安全保障体制ではなく、アメリカやオーストラリアなど同盟国で共同作戦が展開可能な集団的自衛権行使容認を求めたのであり、それが円滑に進めるために安保関連法の整備を日本政府に急がせたのです。

司会（兄）…ということは、自衛隊加憲とは、集団的自衛権行使容認や安保関連法の延長線上に位置しているということかな。

瀬瀬厚…その通りだよ。これら一連の事案をひとつひとつ点として捉えるではなく、これらは一つの面として見ておくべきだと思うよ。これまた宣伝になってしまいうけど、そうした自衛隊とアメリカ軍の連動性について、二〇一六年に『暴走する自衛隊』（ちくま書房）という新書を出しているから、これを読んで貰うと現在の自衛隊が何処に居るのか、見取り図となると思っています。

司会（兄）…それ読んだよ。何でも前の統幕議長の河野という人が安保関連法の成立する一年前にアメリカに

出かけて行って、統合参謀本部や国防総省に出向き高官と会談して、必ずアメリカの意向に従って安保関連法を成立してみせます、と言って約束して帰ってきたことがリークされ、それを詳しく紹介した本だね。

*自衛隊の専守防衛論とは

司会（兄）…先ず質問「専守防衛に対する考え方について」「専守防衛」は簡単に言えば、自衛隊は守りだけの組織で、決してこちらからは手を出さないと。侵略されたりしたら、黙って泣いてやり返すだけの能力を備えた組織。こういうことで良いのか。

瀬瀬厚「専守防衛」の内容を例えば『防衛白書』に直接的に明記している訳ではなく、スローガンのようなものだね。でも私に言わせれば、そのスローガンも今は「死語」に近いものだね。

司会（兄）…自衛隊は「専守防衛」を棄てたのか。別の防衛論を自衛隊は準備した？

瀬瀬厚…その通りだね。政府関係者や防衛官僚や自衛隊制服組の人達が「国を守る」という表現をよく使うよね。恐らく額面通り言えば「攻められたら防ぐ」と言うシンプルな発想を使っている訳ね。でも正確に言えば、現代の軍事常識を絡めれば「国を守る」ことが、同時に「攻めて守る」と同じ意味になってしまふことをまず念頭にお

くべきだよね。

司会(兄)…確か自衛隊の出動パターンには、治安出動、災害出動、警備出動、そして「攻められたから守る」ために自衛隊を出動させる防衛出動があるよね。防衛出動は、実際自衛隊が実弾込めて戦車や戦闘機を繰り出す訳だから、これって戦争することではないの。

瀬瀬厚…その通り。だから自衛隊は防衛のために戦争をする組織だということだね。でその前に先ほど触れたことと絡めて、防衛出動によって行うことは、軍事的にどういふことをかをひとつ事例で説明するよ。

すでに問題となっているから兄貴も知っていると思うけど安倍政権は近い将来山口県萩市むつみ地区と秋田市新屋にイージスアショアと称する弾頭ミサイル基地を設置しようとしているよね。

私は二年前まで山口に住んでいたから萩市むつみ地区の基地予定地には何度も出かけたし、秋田市新屋には2019年1月に講演に招かれた折に住宅地と接近した陸自演習地内の予定地を視察してきたよ。その危険性を会得したうえで、前田哲男さんたちと『イージスアショアの争点』(緑風出版)と題する本も出しました。本を出版した機会に萩市と秋田市でイージスアショア基地設置反対運動をしている人たちと一緒に参議院会館で講

演集会を開催したのです。その前に同

館に防衛省の官僚たちを呼んで設置中止を求める要請行動を地元の人達が企画して、私も前田さんとオブザーバーの格好で出席したのです。その時、まだ30代から40代前半の若手の官僚が10人ほどやってきて質疑応答があったのです。その官僚たちは日本防衛のために必要な兵器であることを力説する訳です。口を開けば「国を守るため」を繰り返す訳です。これを額面通りに聞けば、官僚さんたちが言うように、これで北朝鮮のミサイルが飛んできても大丈夫だと。総額一兆円以上投入するだけのことはある、なんて言い訳を重ねてたね。でも本でも書いたのだけれど、これは北朝鮮のミサイルがハワイとグアムにあるアメリカ軍基地を射程に据えて発射されたミサイルを日本の上空で撃ち落とすために、アメリカからの強い要請で設置が閣議決定されてしまったものなんです。

司会(兄)…え、一寸待ってよ。それって陸上自衛隊が保有する兵器だよね。それなのに何で日本がアメリカの基地を守るために我々の税金で高い兵器を買うことになるの。

瀬瀬厚…だから反対運動があるんだよ。日本人の税金を使って、命中率も頗る怪しいミサイル基地を作るのは間違っている。その所をカバーするために繰り返されるのが日本防衛のため、と

いうデマ、ゴグなんだよ。
兄(司会)…随分と日本を馬鹿にした話だね。日米安保があるからかなあ。
瀬瀬厚…そうとしか言えないし、それが実は国を守る防衛戦略としての「専守防衛」論の本質だよ。しかもね。さらに真実を言うと、少し軍事マニユアツクの話になるかもしれないけれど、イージスアショア基地というのは、要するに弾道ミサイル発射装置のことで、発射装置の名前をMARK41(MK41)いふのだよね。マークフォテイーワン。実はこれが大変な代物で、日本政府が説明しているのは、ここから迎撃ミサイルを打ち出すという説明だけ。同じMK41は攻撃弾道ミサイルも発射できるんだよ。

私たちは軍事情報を何時も追っかけている者からすると、萩と秋田に導入されるミサイル基地は中国やロシアを射程に据えた攻撃弾道ミサイルの発射基地として、アメリカの意向に従う形で陸自への導入が決定されたと捉えているんだよ。

司会(兄)…おおい、国防や専守防衛の話から、とんでもない話になってきたね。つまりアメリカが進めている中国やロシアへの攻撃基地としてイージスアショア基地が建設されようとしている、ということかい。これは聞き捨てならない話だね。

瀬瀬厚…「専守防衛」の話から飛躍したように思われるかも知れないけど、

実はアメリカも日本の中国やロシアが日本に武力侵攻するなんてのは、全く想定しなくて、問題は如何に中国やロシアを軍事的に封じ込めるかがいわゆる日米同盟の最大の目標になっているんだよ。だから自衛隊は毎年相対に高度な共同訓練を実施しているよね。例えば、「ヤマサクラ」という、これは机上演習だけど、毎年大掛かりにやってるよね。そこで計算されつくした作戦が実際に部隊を動かしているのと確認している。こうした演習事例はもう沢山あるよ。そこで言われているのは、「演習のよりに戦争し、戦争のように演習しろ」って。それだけ日本の自衛隊がアメリカなどと共同作戦行動を採れるだけの戦力や能力を保守しているということだね。それが同盟軍と言われる所いだね。だから「専守防衛」というのは、もう頭の片隅にもないかもしれないね。

司会(兄)…それじゃ、自衛隊は日本を守るのではなく、アメリカを守る。他衛隊」と言った方がよいのかな。

瀬瀬厚…アメリカは陸軍、海軍、空軍、それに海兵隊と四軍体制を敷いているけど、皮肉を込めて言えば、自衛隊はアメリカの「第五軍」的な位置にあるかも知れないね。

(次号につづく)